

# ① 25歳 黒船に乗り込む

嘉永6年(1853)6月、浦賀(現神奈川県)に来航したペリー艦隊は、幕府に対し開国を求める大統領の国書を渡して退去します。翌年1月、艦数を増やして再来航した艦隊に、幕府・諸藩の緊張は高まりました。

福井藩では浦賀に斥候(偵察)を送ることになり、そのうちの1人に剣術や砲術の経験があった権六が選ばれます。権六は黒船の状況を時には図を交えて江戸の福井藩邸に報告しました。

権六自身が明治になって記した「佐々木長淳略履歴」(越前史料)によると、2月28日、小舟でペリーの乗るポーハタン号に乗り込んだ権六は、艦上の様子をスケッチし、乗員の求めに応じて剣技まで披露したといえます。藩主・松平慶永(春嶽)は、この黒船再来航の詳細を日録「合同舶入相秘記」に書き記しており、権六のスケッチもここに綴じこまれています。

黒船に乗り込み、スケッチまでした経験は、後の洋式船「一番丸」の建造に役立ったものと思われます。

